沖

5
2023

俳句雑誌（白鳥）

成満の寺

能村　研三

成満の寺に漂ふ木の芽靄

走り独活有無なき酒となりにけり

三寒の理科室図書室は四温

繊密なる朝が始まる花ミモザ

いとも容易く雪吊のはづさるる

何の木と判らぬほどに剪定す

山笑ふ収まり悪き帽子箱

雛段を組みたる後は手出しせず

三方に壁書架となし竜天に

一万歩歩けるうちに木の芽風

一万歩

先日こんな句を作った。

一万歩歩けるうちに木の芽風

三年前のコロナ感染の騒ぎが始まった頃、糖尿病の教育入院ということで二週間ばかり病院に入院した。主に日常の食事指導と生活習慣について指導を受けることが目的であった。入院中から出来る限り歩くことを心掛け、退院後も万歩計をもって家の周辺を歩くことにしたが、時間が経つにつれ、その習慣もいつの間にか萎えてしまった。

退院直後糖尿病の数値は低くなったが、次第に普段の生活が戻るにつれその数値も上がってきた。幸か不幸かコロナ禍のため外での飲食を差し控えたせいか、もとの悪い状態にまでは戻ることはなかった。今も地下鉄に乗る時などは、なるべく階段を利用するように心がけている。

先日、俳人協会の花と緑の吟行会が行われ、会場となる東京の池上本門寺まで行ったが、途中地下鉄が事故で止まってしまい、ＪＲの駅まで歩くことになった。この日は池上本門寺境内を歩いたのを含め、万歩計をみると一万歩を越え距離にして六キロほど歩いたことなる。

そんなこともあってか、先日かかりつけ医に行ったところ、血圧、糖尿病の数値も低下して薬の処方も軽い薬に変わるようになった。

これに油断することなく、飲食に気を付けることと、出来る限り歩くことを敢行したいと思っている。

春休み、孫の陽登が突然山手線を一人徒歩で一周したいと言い出した。私も大学一年生の時、友だちと徒歩で山手線を一周したことがあったので、是非実行することを勧めた。一回目は小手調べで半周し、二回目は見事に完遂し、しばらくして三回目も完遂を果たした。私は友だちと一緒であったが、陽登は三回とも一人での行動であったことに驚いた。

一人で歩くことは、ただ体を動かすだけでなく、いろいろ自分自身で考えることに繋がるのかも知れない。そんなことを考えていたらこんな句が出来た。

春ひとり歩けばひろがりゆく記憶

能村　研三

座禅草　森岡正作

桜満ち仁王の力緩びけり

流速に歩幅合はざる桜狩

真間桜散り急ぐなよ急ぐなよ

高殿に酌む春宵の赤ワイン

三椏の咲き三様の三姉妹

染卵紅茶カップに金の縁

逝く春を惜しまざるものなかりけり

若鮎の

鮎は私の一番好きな魚である。長女の名前も鮎子と付けた。男の子だったら鮎太であったが。中学高校時代の夏休みはもちろんのこと、大学の時も夏に帰省すれば鮎中心の毎日であった。朝起きるとすぐ川土手へ水の具合を見に行った。雨の日は当然駄目で、その濁りが澄むまでは憂鬱な日を送った。風があっても鮎と対決するのは水の底なので潜りさえすればよかった。そしてなんと教育実習の教材は宮地伝三郎の「鮎の話」で、指導教諭に「全て任せる」と言われた。鮎は写真でしか見たことがないとのことであった。登四郎先生に〈若鮎の口の緊りを佳しとせり〉という御句がある、鮎の口の形は石に付いた苔を剥ぎ取るという性質上、他の大方の魚のようには丸くない。「口の緊り」とはすばらしい把握であり、若鮎の凛々しさを端的に表現している。鮎は何につけてもよいのであるが、家の鮎子は何とものんびりおっとりしたものである。

濤声集

オートロック　千田百里

真砂女忌の菜の花和へに効く辛子

春雷や昭和の眠る天袋

膕を確と伸ばしぬ春や春

ふらここで昼餉やリクルートスーツ

竜天にオートロックのドア閉めて

*さくらちるひとひらづつといふ無数

ヨドバシカメラ　辻美奈子

啓蟄のヨドバシカメラにて迷子

白梅のひらくをひとつひとつ聴く

*つばめ来る流線型を鎧とし

黄泉に届かん蒲公英の根張なら

春月のうらがはもなほ濡れてをる

みづうみに沖あり沖は霞みけり

蒼茫集

野火

峰崎成規

羅漢みな伸びするやうな春の風
*歳月を奪ひ去らむと野火走る
峡奥の大字小字桃芽吹く
菜の花に染まり蛇行す水の音
鳥帰る翼潮香を慈しみ
野焼後のあつけらかんの空と風

海引く力

林昭太郎

春うれひ眠り薬のすみれ色
春泥を跳ぶにもありぬ適齢期
水仙の真つ直ぐといふ折れやすさ
勝馬の息の熱さよ風ひかる
白木蓮夜は万蕾の脈打てる
*朧夜の月に海引く力あり

鎧ふもの

栗原公子

*踏青や身ぬちに鎧ふもの捨てて
華やぎて何の寂しさ雛の間
決断のまた揺らぎたる朝霞
全身で笑ひ合ふ子ら草青む
染めむらのなき青空よ木の芽張る
飛石のあはひ埋めたる春の雪

あらせいとう

大沢美智子

海女畑に朝の満ちくるあらせいとう
朝東風や鰭ぴんと立つ漁師飯
桟橋の長き黄昏鳥雲に
*百体の雛や百のかなしみも
蛇穴を出て磁気逆転の崖つ縁
啓蟄や蠢くものを身ぬちにも

飛鷹選評

能村　研三

永き日のそれぞれ部屋にちがふこと　　久間　早苗

春は日の短い冬を体験した後だけに、日永の心持ちが強い季節である。春になって暖かくなると、それぞれが部屋に引き籠って思い思いのことを始めるようになった。お互いのすることには干渉せず、思い思いに時を過ごしたのだろう。

損耗と呼ばるる戦死冬ざるる　　坂井　博

損耗と言う言葉の意味は「へること」「へらすこと」であるが、人の死にこんな言葉を使う悲しさを作者は充分に意識されているだろう。戦争という悲惨な現状が損耗という言葉を現実のものにしていることの辛さを、作者は熟知しているのである。一日も早く損耗となる戦死が無くなることを切に祈りたいものだ。

棒を持て追ひしかの日の走り野火　　久礼　隆志

野火を消すためには、火消し棒という大きな扇の形をしたものが使われることが多い。いかにも原始的な方法であるが、今も野火守は原始時代と同じような方法で火を操っているのである。作者も若い頃、棒で野火を叩いたことが思いだされた。

薄氷に鴨の踏破の冒険図　　吉村さよ子

遠い北の地方から鴨が渡って来るころには、湖や沼の岸辺には薄い氷が張る。その上に危なげに乗った鴨の脚に着目した句である。鴨にとっても、氷が割れないかという不安を抱きつつ慎重な足取りで歩いている。これを「踏破の冒険図」と捉えたのが面白い。

狩するごと野焼の炎追うてをり　　中谷　恭子

久礼さんの「野火」の句とも発想が似ているが、草原で繰り広げる野焼の炎は五メートルの高さにも及ぶこともあり、縦横無尽に草原を躍る炎はまるで生き物のようで、これを操る野火守はまるで狩をしているようでもある。

捕まへに来し鬼と摘む茅花かな　　池之端モルト

幼い頃の思い出であろうか。銀色の穂がたなびく茅花野で隠れん坊をしてじっとうずくまっていたのだろう。茅花は花穂がほうけて白い紫となり、それが一斉に風に吹かれる光景はとても美しい。いつの間にか鬼ごっこが茅花摘みに夢中になってしまった。

重力と浮力のあはひ水鳥よ　　頓所　敏雄

鴨とか鳰とか鴛鴦などの水鳥は秋に渡来し越冬する。冬の間は湖水、河川、潟や海で餌をあさり寒い水の上で冬を過ごす。飛ぶもの潜るもの姿態は様々であるが、水鳥の自ら重さと水の浮力のバランスをうまくとりながら水上に浮かんでいる。

マトリョーシカのやうな山並鳥帰る　　秋谷美智子

マトリョーシカはロシアの民芸品で、人形の中に一回り小さい人形が入る、入れ子構造になっている。マトリョーシカのような山並と言うから、山の奥にたくさん山々が連なっているのだろう。そんな山々を背景に鳥たちは北に旅立っていった。

潮鳴集

石鹸玉　兵藤恵

貝寄風や光の中に砂こぼれ
＊石鹸玉大きく育て不登校
鳥曇抱いた拍子に鳴るギター
鶯餅空気の抜けてゆきにけり
芽柳や不折のロゴの中村屋

大空　川高郷之助

＊薄氷を押して大空傾かす
漢方の効き目じわじわ水温む
村中が川のやうなる雪解かな
春風を歩き胸中軽くする
蒲公英に肩車から降ろしやる

値札に値札　稗田寿明

靴紐を互ひ違ひに結び春
寒色のネクタイ選ぶ余寒かな
＊古本の値札に値札二月尽
白梅や再出発はひとりから
「春」の字に翼ありけりさへづれり

握手　七田文子

＊凍滝の神様がんじ搦めかな
薄氷の離岸握手を解くやうに
貝寄風や人魚の唄も運び来よ
春ひとり木箆で混ぜるマーマレード
雉鳴いて空の一角穿ちけり

湖賊　栗坪和子

雛かざる海鳴り届く二階の間
お納戸に動かぬ春の寒さかな
薄氷や急所の多き人体図
＊夜寒かなこのみづうみに湖賊とは
水音は浅きところにつくづくし

翼なきもの　菅原健一

たんぽぽの絮乗る風を選びをり
＊翼なきものにもやさし春の風
佐保姫の声やもしれぬせせらぎは
街ピアノ指いきいきと春を告ぐ
恋棄てに来たりて拾ふ桜貝

剪定　澤田英紀

春兆す日ごと遠富士薄れゆき
福音を秘むるカウベル牧開く
春の風巻き取るごとく観覧車
＊剪定の思案ととのふ空鋏
懐かしき湯呑みの語る入彼岸

やはやはと　大橋松枝

粉を碾く水車ねむたし竹の秋
蓬摘む一朶の雲の手暗がり
竹林をせめぐ風音犬ふぐり
＊やはやはと波立ち葦の角ほぐす
水温む土管の中の夕明かり

駒送り　清水佑実子

春の雪ちあきなおみの唄をふと
啓蟄や東京へ行く靴を選る
＊菜の花や齣送りめく久留里線
耕して大地の呼吸始まりぬ
勝馬の後姿や風光る

万象　荒井千瑳子

反骨も又良しと酌む今日雨水
うす闇に六つの鐘きく春隣
＊集まりてこその力や花菜の黄
春雷の間合ひパスタの茹で上がる
万象をもらさず包み春の雨

沖作品

能村研三 選

埼玉

久間　早苗

梅一輪十円玉を辻仏
春浅し小川の草の陰に魚
天にひろぐ大観覧車風光る
春霞赤城山の稜線見え隠れ
＊永き日のそれぞれ部屋にちがふこと
ナナハンを同行として遍路道

千葉

坂井　博

＊損耗と呼ばるる戦死冬ざるる
極寒の少女救出微光射す
泥葱の衣を脱ぎきりし真白かな
あかときの大気潤みて春近し
山峡や誰が焚く煙り西行忌
北窓を開けて筑波をたぐり寄せ
帰郷途次越ゆる峠の木の芽どき
上州は風のふるさと山笑ふ
＊棒を持て追ひしかの日の走り野火

節分草にうづくまる影またひとつ
福豆を片手にこぼす歳の数
＊薄氷に鴨の踏破の冒険図
ふきさますココアの甘き春隣
草青む粗く杭打つ山羊の柵
蛤つゆの白濁ほどの迷ひかな

青森

中谷　恭子

＊狩するごと野焼の炎追うてをり
旧正の出店のあかり煌々と
教会に鐘とマリアと冬薔薇
道ならぬ恋でありんす猫の恋
＊捕まへに来し鬼と摘む茅花かな

市川市

池之端モルト

たましひの凍りたる炎よ牡丹の芽
春星や木は根つこから目覚めゆく
春嶺や月は古城につまづけり
父逝くを母知らざりき揚雲雀

吉村さよ子